

東夷傳
高麗本紀
高麗本紀
高麗本紀

ハノールブル記下

正七位大島貞益纂譯

ゼオールジ第四世王ハ先王ノ長子ニシテ是時年
五十八歳先王病ニ罹テヨリ國ヲ監スルコト是
ニ至テ十一年ナリ故ニ位ニ昇テ朝廷ノ制度改
變スル所ナレ時ニ禍亂ノ餘害漸ク去テ貿易復
起シ四隣事ナク國內昌榮ナリ踐祚ノ初一兇漢
チストルウードト云フ者黨ヲ結テ諸執政ヲ殺

シ亂ヲ作サント謀リシカ事洩レテ捕ヘラレ其
 黨五人刑ニ伏ス○王ノ世子タリシ時色ニ溺レ
 テ身行修マラス先王其放心ヲ収束センコトヲ
 欲シブルムンス奪キノ侯ノ女ガカリンヲ迎ヘ強
 ヒテ世子ニ婚セシカ伉儷情薄クカリン惡名
 ヲ負テ他國ニ往キ離居シテ既ニ十六年ヲ過ク
 是歳王ノ位ニ昇ルヲ聞キ歸テ后タランコトヲ
 求メシカ王其前罪ヲ數ヘテ見ユルコトヲ許サ
 ス千八百二十一年七月十九日空ストミンスト
 ルニ於テ即位ノ禮アリ本日カリン其儀衛ヲ

觀ント寺門ニ至リシニ衛士呵責シテ入ルコト
 ヲ許サスカロリン慚愧シ後八月七日遂ニ憤怒
 ヲ以テ死ス○時ニ舊教ノ諸禁ヲ去ル説最モ民間
 ニ盛ナリオコン子ルト云フ者會社ヲ結テ民心
 ヲ諷動シカンニングト云フ者下院ニ在テ頗ニ
 之ヲ主張ス然レモ王弟ヨルクノ侯上院ニ在テ
 之ヲ力阻シ王モ亦之ヲ好マヌ其他空ルリント
 シピールエルドン等有識ノ士ト雖之ヲ拒ム者
 アリ千八百二十五年會計總裁ノ闕クルニ因テ
 王強ヒテカンニングヲ擢用レケレハ空ルリン

改正 卷一 二 大 音 集

トン等怒テ官ヲ退キ其説益盛ナリ然レ氏後八月カンニング病ヲ以テ死レケレハロビンソント云フ者代テ會計總裁タリ○千八百二十一年希臘土耳其ニ叛キ是歳ニ至ル迄數年勝敗決セズ千八百二十七年英國佛俄二國ト共ニ希臘ヲ援ケテ十月廿日土耳其トナバリノ海灣ニ戦テ大ニ土耳其ノ軍艦ヲ破碎ス後千八百二十九年希臘遂ニ國ヲ立テ、バ、リアノ王子オゾヲ以テ其君トス然レ氏土耳其剝剝セラレテ俄人ハ竊ニ志ヲ得英佛ニ在テハ失策タリ后英人モ

亦自之ヲ悔ユト云フ○千八百二十七年一月ロビンソン死シテ左ルリントン之ニ繼キピール隨テ國事總裁タリ是歳テスト及コルポレリ言シノニ律ヲ廢ス此律ハ查理ルス第二世ノ世ニ定ムル所ニシテ國教ノ徒ニ非ル者ハ一切官ニ就クコトヲ禁スル律ナリジンギナルト云フ者之ヲ下院ニ建議シ左ルリントンピール首トシテ之ヲ拒ミシカ遂ニ其議ニ從ヘリ尋テ翌年悉舊教ノ諸禁ヲ廢シ舊教ノ徒ヲ許シテ議院ニ入ラシム然レ氏其徒尚攝政タルコトヲ得ス又愛

倫ノ都督タルコトヲ得ス且、王位ハ必國教ノ徒
 ヲ以テ繼カシメテ君主舊教ノ徒ヲ娶ルコトヲ
 得サル等ノ禁ハ尚存セリ○千八百三十年六月
 廿六日王死ス年六十八在位十一年ナリカロリ
 ント離異シテヨリ別ニ后ヲ納レスカロリンノ
 腹ニ一女アリシカ王ニ先ヲテ死シ王弟ヨル
 ク、侯モ亦既ニ死セルヲ以テ次第クラレンス
 ノ侯之ニ繼立ス○蒸氣機關ノ發明以來世間智
 巧ノ學士之ヲ水陸ノ運輸ニ轉用セントシテ各
 巧思ヲ極ムレバ之ヲ陸車ニ用弁ルハ殊ニ難ク

シテ其試驗屢損敗シ汽船ノ世ニ行ンテヨリ數
 年ノ後尚成功ナシ千八百二十九年又リブル
 ール及マンチヌストルノ間ニ鐵道ヲ舖カント企
 ツル者アリ金ヲ懸ケテ新器ヲ募リシカ其募ニ
 應スル者四人アリ中ニ就テロベルトステヘン
 ソント云フ者ノ製スル所最巧綴ナルヲ以テ乃
 之ヲ兩地ノ間ニ往來シテ始メテ旅客貨物ヲ運
 送スルコトヲ得タリ又王ノ在位中始メテナ
 河上鐵懸橋ノエヲ起シ又テームス河底ヲ鑿
 テ隧道ヲ通ス

查理レム第四世王ハゼオルビ第三世ノ第三子
 ニシテ幼ヨリクラレンスノ侯ニ封セラレ是ニ
 至テ統ヲ受ク年既ニ六十五歳ナリ○初民貢選
 貢ノ制定マリテヨリ年ヲ經ルニ隨ヒ盛衰地ヲ
 換ヘテ其法宜ヲ失ヒ荒村寒郷ニシテ代貢ヲ貢
 スル者アリ巨港富府ニシテ或ハ之ヲ貢セサル
 者アリ甚シキハ昔時ノ盛邑今ハ廢土ト為テ一
 豪農其遺址ヲ占ヌ一入ニシテ數名ヲ貢スル者
 アリ國人久シク之ヲ釐正シテ其源委均一ナラ
 ンコトヲ欲シ其議下院ニ出テ、ヨリ是ニ至ル

マテ幾_下五十年ノ間紛々決セス王ノ位ニ即テ後
 一月佛王_イキールス印行ノ自由ヲ奪ハントシテ
 國人大ニ亂レキールス英ニ來奔シテ其弟ルイ
 ス、ヒリップ_イ佛王タリ是ニ由テ英人心動キ改革ノ
 說益喧_シ然レ王及空_ルリントン等皆之ヲ好
 マス是秋倫敦ノ邑宰其家ニ宴ヲ張リ王ノ親臨
 ラ請ヒシカ行ニ臨テ空_ルリントンニ告クル者
 アリテ云フ今日ノ行多ク衛兵ヲ隨フ可シト空
 ルリントン之ヲ聞テ危疑ヲ生シ王ニ勸メテ其
 行ヲ止ム是ニ於テ上下嫌疑シ十一月空_ルリントン

改正 五

トシ以下諸執政皆官ヲ辭シケレハグレイト云
 フ者代テ首輔ト為リタリグレールハ就新黨ノ巨
 擘ナリ故ニ其黨人隨テ登庸セラレ、千八百三十
 一年三月院中ニ於テ改革ノ議ヲ建テシカ其見
 公會ト齟齬スルヲ以テ行ハレヌグレール乃チ會ヲ
 解テ議負ヲ改撰セシム時ニ民間改革ノ說愈逼
 リ六月新徵ノ議負都下ニ至ルニ及テ循舊黨ノ
 人ハ幾何モナシ故ニ其議成リ易ク是月廿六日
 議案下院ノ決ヲ經テ上院ニ輸シ、ニ上院之ヲ
 受ケス往復數回ノ後其要所ニ於テ一二ヲ變易

セントシケレハ下院怒テ終ニ其議ヲ罷ム是ニ
 於テ怨讟群起シ小民亂ヲ作シ權貴ノ邸宅毀壞
 セラル、者多シ後千八百三十二年三月議案又
 下院ノ決ヲ經テ上院ニ輸サントス英國ノ舊例
 上院固執シテ變セサル時ハ王新ニ世爵ヲ命シ
 之ヲ院中ニ加ヘテ其議ヲ破ルコトアリ今回ノ
 議案グレール又上院ノ為ニ卻ケラレンコトヲ憂
 ヒ王ニ勸メテ此計ヲ用井ントセシカ王之ヲ許
 ナス諸執政則怒テ連署辭職シ都鄙愈洶々タリ
 然レモ空ルリントシ等變ヲ激センコトヲ懼レ

本日他ノ貴族數十人ト謀テ會ヲ避ケシニヨリ
 六月議案遂ニ上院ヲ經タリ其大略古來ノ市邑
 居民二千ニ滿タサル者ハ今ヨリ代貢ヲ貢スル
 コトヲ得ス二千ヨリ四千ニ至ル者ハ一人ヲ貢
 セシム是ノ如クニシテ減スル所ノ數百四十三
 名アリ之ヲ以テ新市邑或ハ繁殖ノ諸州ニ分賦
 シ大小多寡各宜シキヲ得セシム又代貢ノ選ニ
 與カル者皆財産ノ多寡ニ隨テ限制アリ此律中
 亦大ニ其額數ヲ減シ田舎ニ居ル者ハ地租一歲
 五十ポンドヲ出シ市邑ニ居ル者ハ屋租一歲十

ポンドヲ出ス者皆選ニ與カルコトヲ得セシム
 ○千八百三十三年二月新法ニ循テ撰貢スル所
 ノ議貞始メテ倫敦ニ會シ此會中英國本地及諸
 屬土ニ於テ奴隸ヲ畜フコトヲ禁ス初千八百七
 年奴隸ノ貿易ヲ禁スト雖當時現ニ畜ヘル所ノ
 者ハ一時生計ニ窮センコトヲ恐レテ遽ニ之ヲ
 散セス然レモ其中妻ヲ迎ヘ家ヲ成シ子孫ニ世
 襲スル者アリテ之ヲ禁スルニ非レハ其源ヲ絶
 ツコト能ハス故ニ奪ルベルホールス等建議シ
 テ悉之ヲ放釋セシム其數幾八十万人議院二千

万ポンドヲ出シテ主者ノ損失ヲ償フ然レトモ
 主者尚^ホ産ヲ失フ者アリ加フルニ諸属土耕夫ノ
 數ヲ減スルニ由テ田野荒蕪シ一時其害甚^ク鉅大
 ナリ○千八百四年グレー^ニ罷メラレテメルボー
 ルント云フ者首轉ト為リ其議ヲ用井テ賑救ノ
 法ヲ修正ス英國ヘンリー^ニ第八世ノ時ヨリ一パ
 リ^ニ法教區^ノ名^{コト}ニ賑救ノ吏ヲ置キ資本ヲ富有
 ノ者ニ募テ貧人ヲ養ヒ又工場ヲ設ケテ自業
 ヲ營ムコト能ハサル者ニ業ヲ授クル法アリ然
 レ^ニ其弊遊惰ノ風ヲ長レ自立ノ心ヲ薄クシ富

家ハ益重累シテ貧民益多シ加フルニ前數十年
 ノ間事ヲ行フ者ノ無狀ニ依テ費用支ヘスゼオ
 ル^ニジ^ニ第二世ノ世ニ於テハ其費七十五万ポンド
 ニ過^キサリシカ千八百十八年ニ至テハ増レテ
 八百万ポンドニ至^レリ是歲公會中其規則ヲ更
 張^レテ冗費ヲ淘汰シ又貧人ノ道路ニ行乞スル
 ヲ禁^シ倫敦ニ一公解ヲ設ケテ地方ノ庶務ヲ統
 ヘ皆其指揮ヲ待テ施行セシム時ニ又邑官推選
 ノ法改革アリ是ニ至ル迄市邑ノ官吏ハ皆民撰
 ナリシカ議員ノ撰貢ト同シク財産ヲ以テ之ヲ

限り富饒ノ者獨專ニスル弊アリ故ニ其財産ノ
數ヲ減シテ豪戸ノ跋扈ヲ抑損ス○王在位ノ間
ハ就新ノ說盛ニシテ諸執政其黨ニ非レハ大抵
位ニ在ルコトヲ得ス其末年循舊黨稍氣勢ヲ復
シピールメルポールント云フ者ニ代テ首輔ト
為リシカ議院中尚之ニ抗スル者多ク纔ニ二月
ニシテ官ヲ罷メメルポールン又入テ執政タリ
時ニオ、コン子ル黯智ニ長シ小民ノ中ニ權勢ア
ルヲ以テメルポールン等之ト維持シテ循舊黨
ヲ抑ヘピール空ルリントン等ハ奄々トシテ屏

息スルノミナリ○千八百三十七年六月廿日王
死ス年七十三在位七年ナリ王ニ女アリシカ皆
長育セス其姪ビクトリアヲ以テ位ヲ繼カシム
ビクトリア王ハゼオルツ三世ノ第四子ケン
トノ侯エドワードノ女ニシテサクス、コベルグ
ノ部長ノ女ビクトリアヲ娶リ千八百十九年五
月廿四日王ヲ生メリ是ニ至テ適ニ十八歳ヲ全
クス先王死シテ宜シク立ツ可キ者ハ王ノ父エ
ドワードナリシカ千八百二十年エドワード既
ニ死スルヲ以テ王ヲ冊立セリハノーブルノ國

法ハ女子位ヲ繼クコトヲ得ス故ニ別ニゼオル
 ジ第三世ノ第五子エル子ストヲ立テ王トスハ
 ノーブルゼオルジ第一世ノ時ヨリ英ニ合ス是
 ニ至ルマテ七十七年ニシテ又分ル○是歳カナ
 ダ人亂ヲ作シテ獨立ヲ謀リ亞人ノ援ヲ請フ然
 レニ亞人助ケス英人兵ヲ出シテ之ヲ討シ容易
 ニ撲滅スルコトヲ得タリ是ヨリ先カナダ分レ
 テ上下二州ト為リモントリールゲベッキ各其首
 府タリンガ亂後之ヲ合レテ一トシ府ヲモント
 リールニ移シテ地方ノ事ヲ管轄セシム○時ニ

キルチストト名ツクル一黨國中ニ彌漫シテ大
 ニ議院ノ制度ヲ改革セシトス其徒主持スル所
 ノ條目五條アリ曰ク凡成人ハ皆議員ヲ撰ムニ
 預ルコトヲ得ヘシ議員ヲ撰ムハ投票ヲ以テス
 ヘシ議員ハ年々改撰ス可シ議員ニ俸給ヲ與テ
 可シ撰ニ應スル者ハ財産ヲ以テ之ヲ限ル可ラ
 スト其徒大抵ハ傭夫工人ノ類ニシテ未亂ヲ作
 スニ至ラスト雖千八百三十八年及九年ノ間秋
 歛ノ豊足ナラサルニ乘シ處々ニ屯聚シテ黨ヲ
 募リ政ヲ議シ大ニ政府ノ憂ヲ為セリ千八百三

十八年秋其徒大ニマシトルニ聚リシカ其
 數二十万人ニ下ラス翌年又大ニ倫敦ニ會シ書
 フ作テ議院ニ訴フ其書大約數百千葉之ヲ大桶
 ニ盛リ地上ニ轉輾シテ議院ニ至リシニ議院之
 フ受ケス是ニ於テ其徒四方ニ散漫シテ暴虐ヲ
 行ヒ官舎邸宅等其禍ニ罹ル者多シ時又アン
 夫コルン、ロウト名ツクル一黨アリコルン、ロウ
 ハ糶麥ノ法ニシテアンチハ之ヲ拒ムナリ是ヨ
 リ先英國本土ノ耕作ヲ勸奨スル為ニ法ヲ設ケ
 テ本地ノ麥價某以上ニ至ルニ非レハ外國ノ産

ヲ糶賣スルコトヲ禁セシカ之カ為ニ内地ノ麥
 價常ニ騰貴シテ動モスレハ飢饉ヲ生シテ工商
 其害ヲ蒙ルコト最多シ故ニ此輩マシトル
 ニ於テ會ヲ結ヒ國人ヲ風誘シテ終ニ其禁ヲ去
 ラントス其中コブデント云フ者首トシテ事ヲ
 用キ甚權柄アリ○是ヨリ先英ノ商船鴉片ヲ支
 那ニ輸シテ茶葉ニ易フ支那ノ政府屢之ヲ禁ス
 レモ其令行ハニス千八百三十九年道光十林則
 徐兩廣ノ都督ト為リ英ノ商館ヲ圍テ賈客ヲ逐
 ヒ其鴉片ニ萬餘函ヲ焚棄ス英國怒テ之ヲ詰ル

ト雖林則徐屈ハカクセス是歲二國遂ニ兵ヲ構フ○千八百四十年二月十日王サクハカクス、コボルグノアルベルトト婚スアルベルトハ王舅エル子ストノ弟二子ナリ其國ヲ保タサルヲ以テ議院之ヲ英藉ニ編入ンテ三十万ポンドノ歲俸ヲ獻シ國人之ヲクイーン、コンソルトト稱スクイーンハ女王ナリ○是歲英國書ヲ支那帝ニ寄セテ和ヲ勸ムレル支那其書辭ノ不遜ヲ責メテ之ヲ受ケス英軍乃揚子江ヨリ甯波ニ至ル迄哨船ヲ置キ海口ヲ塞テ之ヲ困ス後千八百四十二年英將エ

ルリ即チ義律者ト又國書ヲ持シテ渤海ヨリ北河ニ入り聲言シテ曰ク直ニ北京ニ迫テ自帝ニ謁セント是ニ於テ支那人大ニ懼レ天津ニ於テ和議ヲ開キレカ琦善ト云フ者支那ノ商議ヲ司リ詭譎ニシテ論辨決セスエルリ即チ義律ト怒テ復戦ヲ議ス○是ヨリ先國人メルボルン等ノオコハカクン子ルト結托スルヲ賤テ之ニ服セス千八百四十一年ノ公會ニ至テ循舊ノ黨過半ニ居リレカハメルボルン等遂ニ官ヲ罷メテピール又首輔タリ其他執政多ク黜陟アリハカクルリントモ

亦政院中ノ一員ニ命セラレシカ官ヲ保タス後
 オコン子ルモ亦政ヲ議シ國ヲ盡感スルニ坐レ
 テ捕ヘラレシカ既ニシテ又放釋セラレ後千八
 百四十七年ゼノアニ死ス○千八百四十二年ハ
 ンリ、ポッチンゼルト云フ者文那ノ通商事務總
 督トシテ澳門ニ在リ廈門鎮江定海寧波上海等
 ヲ陷イレテ七月揚子江ヲ上リ直ニ南京ノ城下
 ニ抵リ帝ノ手書ヲ得テ和ヲ議セント請フ然レ
 氏城中依違シテ答ヘス八月十四日黎明英將既
 ニ進撃ヲ令スルニ至リ帝手書ヲ出シテ和ヲ請

ヒケレハ英軍乃兵ヲ止メ尋テ是月二十九日遂
 ニ和成テ兵ヲ罷メ支那六百萬ポンドヲ出シ軍
 費ヲ償ヒ新ニ廈門福州上海寧波廣東ノ五港ヲ
 開キ香港全島ヲ割テ英ニ讓與ス○千八百四十
 五年夏ヨリ秋ニ涉リ陰霖連旬風雨屢至リ歲大
 ニ熟セス愛倫ノ馬鈴薯病ヲ生シ凶荒尤甚レ是
 ニ於テアナンチ、コルン黨ノ說益行ハレシニ、為セ
 ルモルベス等ノ諸人首トレテ頻ニピールヲ責
 ムピールモ亦時勢ノ止ム可カラサルヲ察スレ
 氏其黨人ノ譏ヲ懼レテ禁ヲ去ルコト能ハス遂

ニ自請テ官ヲ退キケレハ王乃為セルヲ徵シテ
 之ニ代ヘレカ又其推服スル者少キヲ以テ為セ
 ル官ニ在ルコト能ハス尋テピール又職ニ復シ
 千八百四十六年一月遂ニ院中ニ建議シテ其禁
 ヲ除ス然レモ其黨人ハ大ニ此事ヲ悦ハス是ヨ
 リピール大ニ勢ヲ失ヒ後久シカラスシテ遂ニ
 又職ヲ辭シ多セル代テ首輔ト為レリ○千八百
 四十七年愛倫又大ニ饑饉シ小民亂ヲ作ス政府
 金穀ヲ發シテ賑救スレモ鎮靜セス既ニシテ亂
 魁相繼テ縛ニ就キケレハ亂徒時ヲ經テ漸ク消

散ス翌年キルチスト又倫敦ニ於テ亂ヲ謀リ其
 徒二万餘人ケンニントシノ野ニ屯聚セシカニ
 ルリントン命ヲ受ケテ之ヲ鎮撫シ倫敦ノ市民
 十五万人踴躍シテ出テ禦キケレハ亂徒震懼シ
 又戦ニ及ハスシテ平定セリ○千八百五十一年
 英國始メテ博覽會ヲ設ケ大ニ萬國ノ異寶名器
 及新奇ノ物品ヲ集メテ展觀ス其舉王ノ夫アル
 ベルトノ創意セル所ニシテ其意諸國ノ工藝ヲ
 戦ハシムルニアリ倫敦中ハイドパルクト名ツ
 クル公園ニ於テ大玻璃宮ヲ作り其中地球上ノ

緯度ニ隨テ各國ノ方物ヲ排列シ五月一日ヨリ
 場ヲ開クコト凡百六十日其事ノ奇ナルト其結
 構ノ大ナルトヲ以テ四方ヨリ來觀スル者齎至
 蝟集シテ六百万人ノ多キニ及フト云フ○千八
 百五十二年九月空ルリント死ス侯沈勇雍和
 ニシテ兵ヲ用ルコト神ノ如クマルボロト
 其名ヲ齊シクシテ而シテ其狡詐反覆ナシ晩年
 首輔ト為ルニ至テハ其持論往々議ス可キ者ア
 リト雖又能ク意ヲ在ケテ人ニ從ヒ相衝擣スル
 ニ至ラス死ニ及テ議院公財ヲ以テ葬儀ヲ理シ

遠近相傳テ葬ニ會スル者沿途實ニ立錫ノ地ナ
 シト云フ○千八百五十三年俄羅斯土耳其ト宗
 教ノ事ヲ争ヒ俄羅斯コンスタンチノブルノ希
 臘教徒ヲ管轄シ且教徒ノ為ニゼリサレハ等
 ノ地ヲ據有セントシテ遂ニ兵ヲ構フ然レハ俄
 羅斯ノ意ハ土耳其ヲ亡ホシテ南海ニ出ツルニ
 在リ俄帝ニコラス英ノ中立センコトヲ欲シ其
 公使ニ説テ曰ク事成ラハ埃及ヲ以テ英ニ讓ラ
 ント然レハ英國之ヲ許サス時ニ佛國那波列翁
 弟三世新ニ位ニ即テ英ト好ヲ修シ交際甚親善

ナリ故ニ二國軍艦ヲ黑海ニ遣テ土耳其ノ為ニ
 其北境ヲ防護シ俄ニ勸メテ兵ヲ罷メシメント
 セシカ是歳冬英佛俄土ビインナニ會シテ和ヲ
 議シ其議遂ニ破レケレハ翌年夏英佛兵ヲクリ
 ミアニ進メ九月廿日俄人ヲアルマニ破テ遂ニ
 セバストポールヲ合圍ス時ニ俄人ノ港中ヲ守
 ル者六万人マンスキコフト云フ者之ヲ號令シ
 其前久シク戦備ヲ修セシヲ以テ要害甚完シ英
 軍ハ二万三千ラグラント云フ者之ニ將トシ佛
 軍二万五千アルナウド之ニ將トシテ十月ヨリ

攻戦ヲ開キ砲聲殷々トシテ連旬絶エス是月廿
 五日城將リプランジート云フ者三万人ヲ率非
 テバラクラバノ英軍ヲ襲ヒシカ劇戦時ヲ移シ
 テ英軍之ヲ撃却ス十一月五日朝俄人又大霧ニ
 乗シテ圍ヲ突キ英人ヲインケルマニ襲フ英
 人銃槍ヲ以テ接戦スルコト凡十一合英ノ兵數
 ハ俄人ニ及ハサルコト十ノ一ナリ然レトモ勇
 戦シテ退カス時ニ佛將アルナウド既ニ死シテ
 カンロベルト之ニ代リ兵ヲ分ケテ來援シケレ
 バ俄人遂ニ大敗シテ城中ニ退キタリ是日英佛

ノ死傷數千人俄人ノ喪々所ハ英佛ノ全軍ニ齊
 シ是ヨリ後ハ俄人壁ヲ固クシテ出テス城中城
 外唯大砲ヲ放テ日ニ相攻撃スルノミナリ是冬
 ノ間攻兵高地ニ陣シテ日ニ海風ニ曝サレ凍饑
 シテ命ヲ墮ス者數ヲ知ラス城中ノ援兵モ亦數
 千里ノ冰雪ヲ超エテ至レル者ニシテ大半ハ皆
 用非ル可カラス時ニ英國ニナイチンガルト名
 ツクル一女子アリ本國ニ在テ士卒ノ寒苦ヲ聞
 キ伴ヲ結ヒ軍中ニ至テ衣垢ヲ洗ヒ傷人ヲ看護
 ス士卒皆感激シ泣テ恩ヲ謝スル者アリト云フ

千八百五十五年春攻兵連營ノ間ニ鐵道ヲ鋪キ
 汽車ヲ馳セテ軍中ノ輜重ヲ運輸ス又黑海ニ電
 信線ヲ沈メテ直ニ本國ニ達レケレハ巴勒及倫
 敦ノ報復皆一日ニシテ辨ス○前年ノ間英ノ海
 軍大將子ピール軍艦ヲ率非テバルルル海ニ往
 来ヒシカ大ニ為ルコトアラヌ千八百五十五年
 ドンダスト云フ者之ニ代リシカ又記ス可キ者
 ナニ別ニエドモンドライオンスト云フ者數艘
 ノ船ヲ以テアソブ海ニ入りケルチエニカル等
 ノ數邑ヲ奪ヒケレハセバストポールノ勢孤立

城中漸々困弊ス○是歳俄帝ニコラス死シテ
 其子アレキサンドル二世之ニ嗣キシカ父ノ
 意ヲ繼テ兵ヲ罷メス六月英ノ攻兵ノ將ラグラ
 ンコレヲ患ヒテ死シケレハ大將シンプソジ
 ト云フ者之ニ代テ攻圍ヲ督シ尋テ佛軍モ亦ペ
 リシールト云フ者来テカンロベルトニ代リタ
 リ斯テ九月五日ヨリ攻兵又大舉シテ城ニ逼リ
 砲戦スルコト三日ニシテ八日ニ至リマラコフ
 ト名ツクル壘壁少シク崩潰シケレハ佛軍ノ一
 隊蟻附シテ壁ヲ攀チ遂ニ之ヲ奪フ是日英軍モ

亦レダント名ツクル別堡ヲ襲ヒ敵ヲ驅逐シテ
 暫ク之ニ據リシカ後軍續キ至ラスシテ又追却
 セラレタリ然レモ佛人マラコフヲ得テ邑中ニ
 狙撃シケレハ俄人竟ニ守ルコト能ハス同日夜
 邑ヲ棄テ、退走ス俄人退クニ臨テ軍器ヲ收メ
 去ルニ及ハス其大砲四千門彈丸十万火藥數千
 桶皆攻兵ノ手ニ落ツセバストポール前年九月
 始メテ圍ヲ受ケレヨリ是ニ至テ全一周歳ナリ
 戦後英佛ノ兵邑ノ廢址ニ幕ヲ張テ冬ヲ過シ、
 カ俄人疲困シテ再兵ヲ出スコト能ハス千八百

五十六年一月、奧帝ノ周旋ニ依テ和議成リ、爾來
俄土二國共ニ黑海中ニ軍艦ヲ置カサランコト
ヲ約シ、三月諸國ノ使節巴勒ニ會盟シテ戰ヲ罷
ム。○千八百五十六年又支那ト隙アリ、廣東ノ官
吏英ノ商船一艘ヲ襲奪ス、英國之ヲ詰責スレ、英
報ヲ得ス。是冬遂ニ兵ヲ發シテ廣東及ボグノ諸
城ヲ奪フ。○クライブ及ハスチングスノ時ヨリ
印度ノ屬地日ニ廣大ニ為リ、是時ニ當テインド
ス河道及ヒマラヤ山脈ヲ限リ、東ハ緬甸ニ境シ
テ其幅負迫ニ英ノ本地ヨリモ大ナリ。是ヨリ先

東印度商社土人ヲ募テ隊伍ニ編シ、富盛ノ地ニ
備ヘテ鎮兵ト為シ、カ土人ハ大抵回教ヲ奉シ
テ深ク牛豚ノ類ヲ禁忌ス。然ルニ此頃施條銃始
メテ印度ニ至リ、其藥包皆軟膏ヲ塗レリ。土兵包
上ノ膏ハ或ハ牛豚ノ脂肪ナランコトヲ疑ヒ之
ヲ用非ルヲ屑トセス。既ニシテ軍中訛言アリテ
曰ク英人密ニ土兵ヲ強ヒテ耶蘇教ニ從ハシム
ル計アリト。千八百五十七年五月、ベンガルノ兵
隊遂ニ其將官ヲ逐テデルヒニ至リ、古蒙古ノ王
族ヲ擁シテ印度帝ト稱シ、英ニ反セシカ所々ノ

兵隊相續テ蜂起ニ須臾ニシテベンガルノ全軍
 皆反徒ニ加ハリタリ是ヨリ先東印度會社土人
 ニ憑信シテ全ク英兵ヲ置カス故ニ歐洲各國皆
 英國ノ久シカラスシテ全印度ヲ失ハンコトヲ
 危メリ六月英ノ將官其老幼婦女ト共ニカウ
 ポールニ在リ亂徒數重ニ之ヲ圍ミシカ城中食
 盡キ兵寡クレテ守ルコト能ハス攻兵ノ將サヒ
 グト云フ者固英人ト交リアルヲ以テ守將タ
 レル之ニ憑テ降ヲ請ヒケレハリヒブ之ヲ諾シ
 約シテ曰ク攻兵舟ヲ辨シテ城中ノ男女ヲアル

ラハバッドニ護送セント然レ氏廿七日約成テ英
 人既ニ舟ニ乗スル頃岸上忽テ大小砲ヲ兩發シ英
 人擒獲セラレ、者百五十人其他ハ悉、舟中ニ殺
 サル後英ノ別軍カウンポールニ迫ルト聞キ土
 人又其捕擄ヲ屠殺セリ時ニシテカノウモ亦重圍
 ノ中ニ在リハブロクト云フ者之ヲ赴援セント
 僅ニ二千餘人ヲ以テ轉戦スルコト八回ニシテ
 遂ニカウンポールトシカノウノ間ニ至リ又大
 ニ土兵ヲ破リシカリクノウニ達スルニ及テ兵
 衆羸弱ニシテ戦フ可カラサルヲ以テ邑中ニ入

ヲ僅ニ堡砦ヲ墨守ス然レモ九月ニ至テ本國ノ
 兵漸ク到著シ是月廿一日英將卒ルソント云フ
 者デレヒヲ復シ後カンパバルト云フ者ニクハ
 ヲノ圍ヲ潰ヤシ年末ニ至テ亂全ク平ラキタリ
 是ニ至ル迄東印度ハ尚商社ノ有ニシテ倫敦ニ
 商社ノ本局アリ社中ヨリ一人ノ總督ヲ印度ニ
 遣テ其事務ヲ管轄セシメ又政府ニボールドオ
 フ、コントロールト名ツクル一局ヲ置テ商社ノ
 事ヲ統ヘシカ亂後終ニ商社ヲ廢レ印度ヲ以テ
 直ニ政府ニ隸ス○千八百五十八年英人佛帝那

波列翁ヲ刺殺セント謀ル者アリ時ニパルマル
 ストーント云フ者首輔トナリ之ヲ捕ヘテ佛ニ
 謝シ且此ノ如キ徒ヲ處スル法ヲ嚴ニシテ將來
 ヲ懲サントセシカ其議行ハレス議院其佛ニ設
 ルヲ責メケレハパルマルストーン職ヲ辭シデ
 ルベ一之ニ代リタリ○千八百五十八年議負財
 産ノ限制ヲ廢シテ貧富ニ論ナク皆撰ニ應スル
 コトヲ得セシメ又猶太教徒ヲ許シテ議負タラ
 シム○是歲六月支那ト天津ニ於テ和ヲ講シ五
 條ヲ約シテ曰ク英ヨリ公使ヲ命シテ北京ニ居

改正
 三十一
 八月

クベシ、爾來耶蘇教徒ヲ虐スルコト勿ルベシ、英人支那ノ内地ニ往來スルコトヲ許ス可シ、英船揚子江ニ航スルコトヲ得ヘン、約後一年內ニ鎮江港ヲ開クヘント又曰ク支那百二十五万ポンドヲ出シテ半ハ廣東賈客ノ損失ヲ償ヒ半ハ戰費ニ供ス可ント然レモ翌年六月英佛ノ使節帝ノ署押ヲ得ント北京ニ至ル途中支那人太沽ノ諸堡ニ潛伏シテ其護衛ヲ掩撃シケレハ英人不同意ニ出テ殺傷セラル、者甚多シ是ニ於テ英佛大ニ怒リ再兵ヲ出シテ海岸ノ諸城ヲ陷イル

千八百六十年英佛兵ヲ連テ天津ヲ奪ヒ十月十三日遂ニ北京ヲ陷イル咸豐帝亂ヲ熱河ニ避ク尋テ前年天津ノ議ニ循テ和ヲ講シ支那金ヲ出シテ大沽ノ役ニ死スル者ヲ吊レ且ユウリシテ英ニ讓テ兵ヲ罷ム○是歲デルバ一職ヲ辭シパルメルスト一ニ再ヒ首輔タリ

今邨 亮 校

改正 英史卷十終

改正

卷十

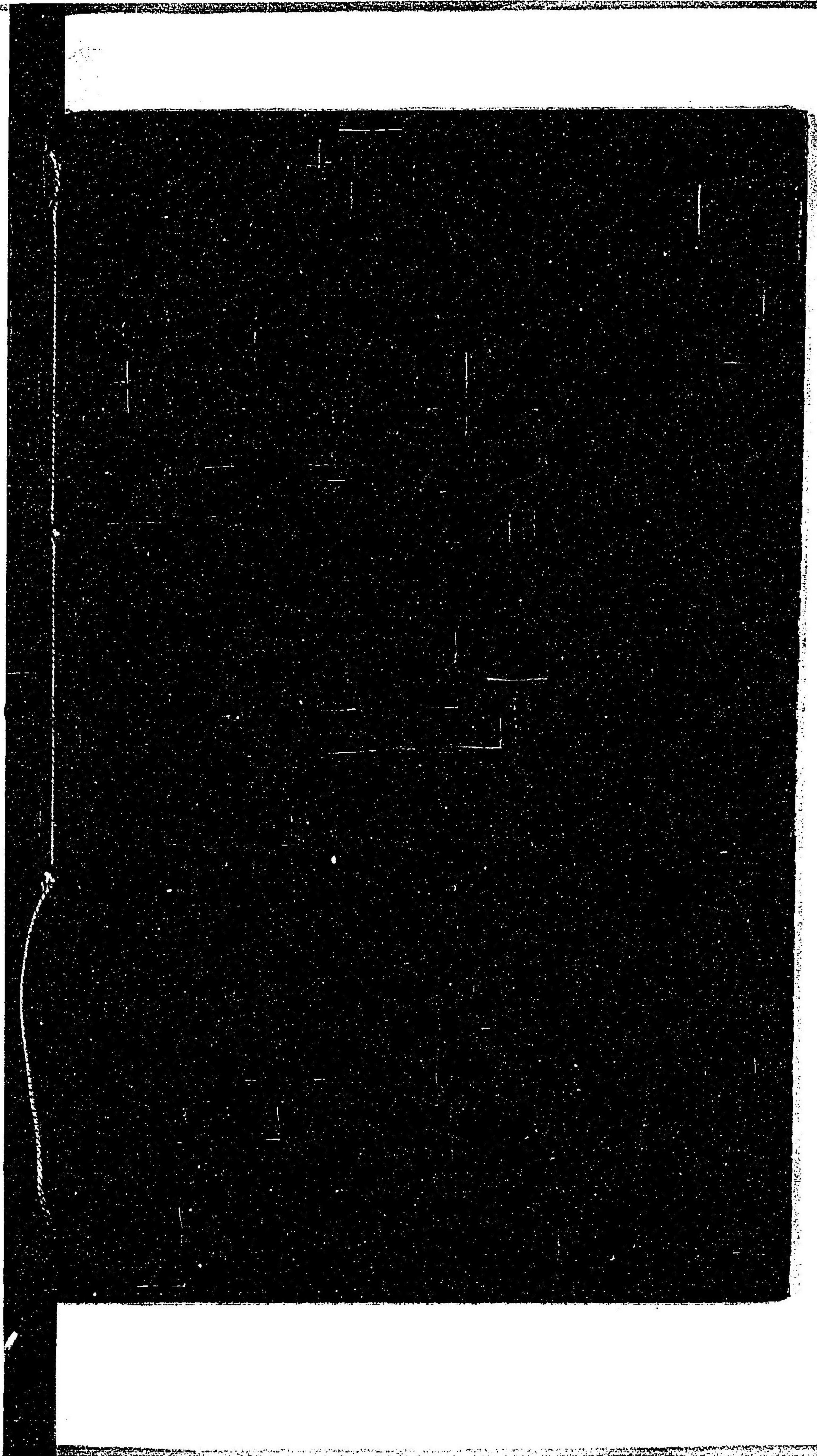
二十

支那

再版英史

卷一

文音



三才

東泉圖					
一	四	二	五		
冊	考	架	函	湯	類